順天堂グローバル教養論集　第二巻（2017）18–32 頁

研究論文

海の反乱
－植民地期カンボジア、コムポート地方の 1885 年反仏反乱－

Anti-France Rebellion on the Gulf of Thailand:
Kampot（Cambodia）in 1885

北川 香子[1)*]

Takako KITAGAWA[1)]

Abstract

From January 1885, anti-French uprisings broke out at various points in the Kingdom of Cambodia. In general understanding, those were the reaction of local elites to the treaty of 17 June 1884 which forced significant changes on the political and economic system of the kingdom, and after the rebellion, “the eclipse” of the King *Norodom* began. Actually, because there have been extremely few studies on the social history of Cambodia under the French colonialism, little is known about the social conditions as background of the rebellion. Therefore, I took up a series of uprisings in the region on the Mekong River in a former article to clarify the process of the rebellion, the positions of the chiefs of the rebels in the local society, and the structure of the rebels’ corps there. In this study, I investigated the same problems in the region along the Gulf of Thailand to compare with the former.

In both regions, the rebels did not form a simple organization with hierarchical structure, but loose aggregates of bands led by individual chiefs. Most chiefs were holding traditional titles of officials, as governors and *balats*（deputy governor）, and issued Khmer documents which stated their orders to mobilize inhabitants, to collect supplies and so on. In any case, the positions of local elites were not hereditary, but required one’s own resource to lead numbers of people. Only the kingship was able to give legitimacy to their social status in a way widely recognized across the regions, and sometimes they chose “a descendant of the Kings” to support, to reinforce their own status.

In the transition of the rebellion, most local elites recognized *Norodom* as the legitimate king, and the Second King *Sisowath* as his successor, and submitted to them to restore the traditional social order, but never surrendered to the military power of the French colonial

[1)] 順天堂大学 国際教養学部　（Email：kitagawatakako@mbr.nifty.com）

[*] 責任著者：北川 香子

〔August 24, 2016 原稿受付〕〔December 22, 2016 掲載決定〕

government. It may be thought that stabilization of the King's rule after the rebellion gave conditions advantageous for the French to realize "the colonization without the collision" in Cambodia.

Key words

カンボジア、タイ湾、フランス植民地期、反乱、王権

Cambodia, Gulf of Thailand, French Colonial Period, Rebellion, Kingship

1. 序論

カンボジアがフランスの保護国となって二十余年後、1884 年 6 月 17 日の新条約で、王国の政治経済制度に大幅な変革が加えられ、フランス人理事官が各地方に配置されることになった。その翌年、1885 年 1 月 8 日早朝のサムボー *Sambour* 基地（メコン河上流）攻撃を嚆矢として、各地で反仏反乱が勃発した。フランスは 4,000 人の兵力を投入し、ノロドム *Norodom* 王とその兵力の助けを受けて、1886 年末までに一応の平穏を得た。現在のところ植民地期カンボジア社会史研究は極めて少なく、この反乱についても、通史の一部として叙述されるものの、本来ならばその裏づけとなるべき同時代現地史料による実証研究を欠くという、異常な状況にある。

東南アジア研究全体では、植民地期の経済と民族運動・ナショナリズムは、最も研究が盛んな分野である。それにもかかわらず、カンボジア研究で植民地期が注目されない理由には、メコン東岸地域のゴム園を例外として、大規模なプランテーション開発などが行われなかったこと、「衝突なき植民地化 une colonisation sans heurts」と表現されるように（Forest, 1980）、大規模な抵抗運動は発生しなかったとされてきたことが挙げられる。

オズボーン Milton Osborne は、1885 年反乱に関するフランス人の叙述が印象論的で、フランスが困難に直面した事実を隠蔽しようとする傾向にあったとする。チャンドラー David Chandler は、フランス人の著作は何も起こらなかった時代として、植民地期を省略してしまう傾向があるという。タリー John Tully もまた、「理想的な、衝突のない、恩恵としての植民地支配」という宗主国の歴史観の存在を指摘している。オズボーンとチャンドラーは、フランス語の著作に比すれば多くの紙数を 1885 年反乱に割いているが、いずれも通史であるために、ノロドム王の権威が衰え、フランスの支配が強化されていく 1 過程としての政治史的な概説にとどまっている。ノロドム王の反乱への関与については、王が背後で糸を引いているのではないかという疑惑が当初から存在したが、決定的な史料的根拠はなく、王は、少なくとも表向きは、第 2 王で王弟のシーソヴァット *Sisowath* や大臣たちに命じ、フランスに協力して反乱の鎮圧にあたらせているし、オズボーンやチャンドラーも、王の威光が反乱の鎮静化に大きく作用したことを認めている（Chandler, 2008, pp. 167–185; Osborne 1969, pp. 206–230; Tully, 1996, p. vii）。

植民地支配を経験した大陸部東南アジア諸国のなかでは、唯一カンボジア王権のみが現在も存続している。とくに 1970 年代から続いた内戦の後、1993 年に国際連合カンボジア暫定統治機構（UNTAC）の監視下で行われた選挙では、独立の英雄ノロドム・シハヌーク *Sihanouk* が復位して、カンボジア王国が復活する道が選ばれた。現在のカンボジア社会における王権の意味を理解するためには、前近代から現在のあり方への変容過程、すなわち植民地期のカンボジア王権とフランス植民地権力、その支配下に

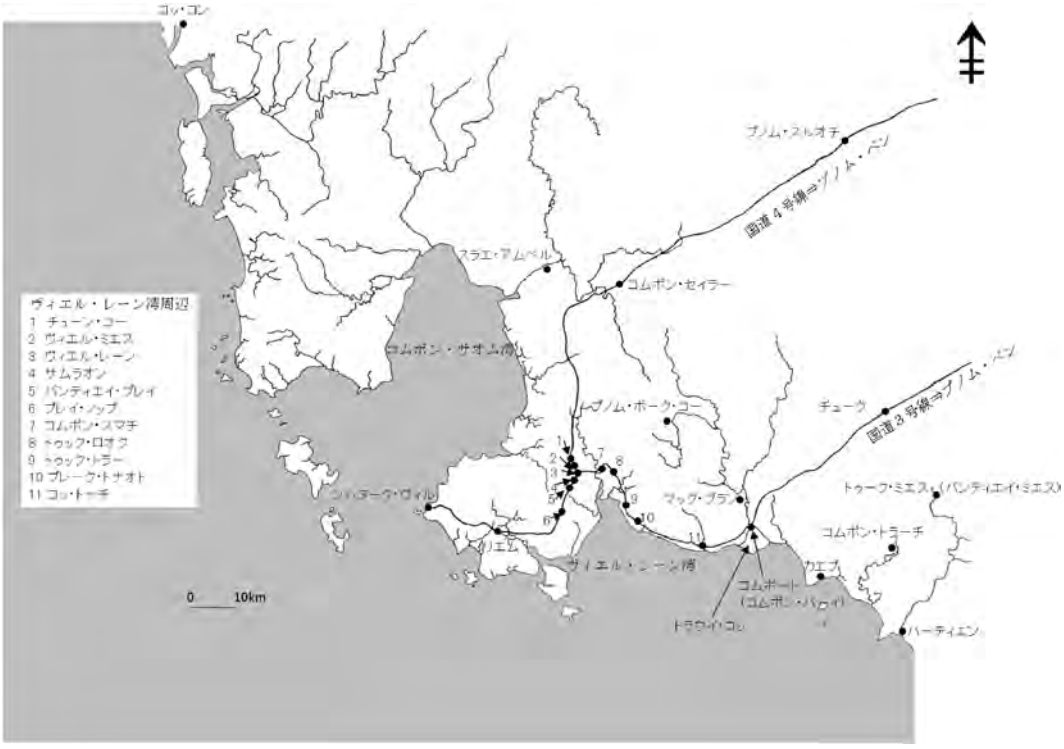

図 1.　タイ湾岸地域

あった人々との関係を歴史学的に検証することが必要である。

さらに通史では、現在のカンボジア王国の領域内における個別の地域性はほとんど考慮されないが、1885 年反乱には中心的指導者はおらず、各地域の官人など有力者が長となり、地の利を生かしてゲリラ戦を展開し、武器で優るはずのフランス側を翻弄した。先に「一応の平穏」と表現した通り、指導者の逮捕や処刑によって終止符が打たれたのではなく、現地に反徒の勢力が残ったまま、戦闘が終息していったのである。これは 1990 年代末以降のクメール・ルージュのあり方とも似通っている。したがって地域史の視点から、地域における反乱の具体的な様相、誰が反徒であったのか、反徒団がどのように構成されていたのかなどの点を明らかにすることもまた、カンボジア近現代史を理解するために有用であると思われる。

筆者は先論において、メコン沿岸地域の 1885 年反乱に関わる同時代史料を分析した。その結果この地域では、主要な反徒の長たちが地方の知事を称し、その権威によって住民に税を課し、反乱に動員していたこと、彼らの任命者は王、第 2 王、反乱した王弟シーヴァッター *Si Votha*、さらには同じ反徒の長など多岐にわたっていたこと、反徒は組織的なまとまりを構成しているわけではなく、個別の集団が割拠して、それぞれ反乱を継続しており、フランス側の軍事力ではそれらを全て殲滅し、全域を制圧するのは不可能であったこと、新たにノロドム王によって任名された知事たちが、王が授与した信任状を住民たちに呈示し、正統性を認めさせ、反徒から離脱させていくことで、反乱が徐々に終息していったことを明らかにした。すなわち反乱の鎮静化に際して、現地の住民たちは植民地権力に服属したのではなく、ノロドムを自分たちの王として再承認していったと理解すべきではないかと思われる（北川, 2014）。

続く本論では、タイ湾岸地域を取り上げる。メコン沿岸がラオスーカンボジアーベトナムを

貫く仏領インドシナの大動脈として、植民地期に成長を遂げたのと表裏一体をなして、タイ湾岸は、前植民地期には対シンガポール交易を目的とする「王の港」コムポート *Kampot* を中心に栄えたものの、仏領インドシナではサイゴンにその地位を奪われ、辺境化していった地域である。なお現存する史料が限られているため、先論と同様、本論でも植民地官吏による現地報告を主史料とせざるを得ない。ただしタイ湾岸地域に関しては、反徒の長の 1 人、バラット・クオン *Balat Khuon* のクメール語書簡が残されている（Francon, 1887）。反徒側の文書が残ることは珍しく、貴重であるため、4 章 3 節でその内容を紹介する。

2. 反乱前後の地域状況

タイ湾岸地域はカルダモン山脈[1] によって、王都プノム・ペン Phnom Penh（プノンペン）など、王国の中核地域から隔てられている。主要港市のコッ・コン *Kaoh Kong*、スラエ・アムベル *Srae Ambel*（コムポン・サオム *Kampong Saom*）、コムポートは、山脈から海に流れ出すプレーク *Prek*（川）のうち、比較的規模が大きいものの河口近くに立地している。

コッ・コンとコムポン・サオムは 18 世紀、コムポートは 19 世紀から文献史料で存在を確認することができるが、詳細な情報が得られるのは、1880 年末のパヴィー Auguste Pavie による踏査（Pavie, 1884）以降である。反乱の発生後は、ルクレール Adhemard Leclère らコムポート理事官が、盛んに現地情報の収集や巡察を行っている。本章ではこれらの史料を比較して、反乱前後で地域にどのような変化が起こったかを確認していく。

2.1. コムポート以東：バンティエイ・ミエス *Banteay Meas* 地方、ピエム *Peam* 地方

1887 年 3 月のルクレールの巡察報告書（Leclère, 1887b）によると、ピエム地方の中心地コムポン・トラーチ *Kampong Trach* は、周辺の村々[2] に開かれた中国人の胡椒園の集荷センターであり、かつては 200 軒以上の家屋があったが、反乱のために住民が退去し、プレーク右岸に 20 軒、左岸に 40 軒の計 60 軒ほどに縮小していた。

2.2. コムポート以西：プノム・ボーク・コー *Phnam Bokor* 南麓

パヴィーの踏査録を見ると、この地域では、プノム（山）・ボーク・コーから海に注ぐプレークと、海岸に沿った陸路の交点に村落が立地し、上流の森林産物や周辺で生産される米などを輸出し、衣類や煙草、檳榔子などの生活必需品を輸入する小港として、コムポートと結びついていた。

1888 年 1 月のルクレールの巡察報告書（Leclère, 1888a）と比較すると、村落人口は、反乱の前後で著しく縮小している。パヴィーはコッ・トーチ *Kaoh Touch* に 15～20 軒の住居があったと記しているが、ルクレールは漁民兼農民のカンボジア人の家が 4 軒と記している。プレーク・トナオト *Preaek Tnaot* では、パヴィーがカンボジア人 20 家族、多数の中国人商人とアンナム人（ベトナム人）の木こり 100 人ほどが住んでいたと記しているのに対し、ルクレールはわずかにアンナム人の家が 5 軒と寺院が 1 つ、遠方のやぶのなかにカンボジア人の家が散らばっているのみで、「かつて 20 軒以上の家があった痕跡」を確認したとする。

プレーク・トナオトの衰因は、フランスによる鎮圧戦であった。村に入ったルクレールは、女性たちから、ヴォベール Vaubert 隊に捕えられ、プーロ・コンドール *Pulo Condore* に投獄されている夫や父親ら、10 人ほどの解放を懇願されている。

2.3. ヴィエル・レーン *Veal Renh* 湾周辺

1905 年 4 月のコムポート理事官ルロワ Leroy の巡察報告書（Leroy, 1905）では、ヴィエル・レーンが「コムポートのまさしく穀倉」であり、広

大な土地と多くの水源に恵まれていると記している。1888 年のルクレールの報告書を見ると、この地域では、プレークの水源に水田が開かれている村が多い[3)]。パヴィーもまた、トゥック・ロオク *Tuek L'ak*、ヴィエル・レーン、サムラオン *Samrong*、リエム *Ream* の 4 スロック *Srok*（地方）で収穫される米の大部分がコムポートに輸出されていたこと、ヴィエル・レーンの水田の大半がコムポートの中国人やチャーム人に属しており、現地の農民が彼らに従属していたことを記している。

反乱の前後では、プノム・ボーク・コー南麓地域とは対照的に、村落の規模が格段に大きくなっている。トゥック・ロオクでは、パヴィーが混血 métis 中国人の小屋が 12～15 軒としているのに対し、ルクレールは 60 軒の家があり、うち 20 軒は中国人のもので、残りはカンボジア人のものであったとしている。コムポン・スマチ *Kampong Smach* では、パヴィーが混血中国人あるいはカンボジア人の小屋が 20 軒としているのに対し、ルクレールは中国人商人の家 30 軒とカンボジア人農民の家 20 軒と記している。ヴィエル・ミエス *Veal Meas* とサムラオンでは、パヴィーは住居の数を記していないが、やはり規模が拡大している可能性が高い。ルクレールはヴィエル・ミエスについて、コムポートよりも立派な寺院があり、50 軒ほどの家が平原に散らばっていて、そのうち 20 軒ほどは中国人商人の家であったと記している。サムラオンにも 50 軒ほどの家があり、うち 25 軒がマレー人のものであった。

反乱中のこの地域は反徒の勢力圏であり、コムポートとの政治的・経済的紐帯は断たれていた。1886 年 10 月のコムポート理事官府月報に、以下のような報告がある。トラウイ・コッ *Traeuy Kaoh*（現在のコムポートの町の正面にある中州）のマレー人の多くがヴィエル・レーンに水田を持っていたが、反徒を恐れてトゥック・ロオク沿岸に行かなくなった。一方ヴィエル・レーンの住民たちは、反徒を支援しているため、フランス人を恐れてコムポートまで米を運んで来なくなった。その結果、充分な量の米がコムポートに供給されなくなってしまった。またルクレールの報告書を見ると、彼が巡察中に会見したメー・スロック *Me Srok*（村長）の大半が元反徒であり、「戦争」中に反徒が築いた堰や砦が随所に残存していた[4)]。

2.4.　コムポン・サオム湾：スラエ・アムベル

パヴィーはスラエ・アムベルが「ムサン *Messanh* 年（巳年、1833 年）」のシャムの侵略によって徹底的に破壊され、全住民が捕虜として連れ去られ、地名の由来となった塩田（スラエ・アムベルはクメール語で塩田を意味する）が放棄され、昔日の繁栄を失っていたと記している。その後、中国人や中国系シャム人が移り住んできて、彼の訪問時には 50 軒ほどの小屋があり、うち 2 軒のみにアンナム人が住んでいた。水際の家々の前には半ダースほどの小型ジャンクが停泊し、コムポート、チャンタブン（チャンタブリー *Chanthaburi*、現タイ領内）、バンコクと交易しており、シャムのティカル *tical*（バーツ）、コーチシナの緡 ligature などが貨幣として流通していたが、仏領インドシナのピアストル piastre（ドル）は見られなかった。

1890 年 12 月のコムポート理事官バルブ Barbe の巡察報告書（Barbe, 1890）から、スラエ・アムベルが反乱によって再度荒廃したことが分かる。40 軒ほどの小屋の半分が戦争で破壊され、あたりには家財が散乱し、板には焼け焦げた跡が残っていた。残された住民は、シャムやコムポートに脱出する手段を持たない、貧しい人々ばかりであった[5)]。廃材を利用して「王の砦」が建てられ、コムポートの官人 2 人の指揮下に 20 人が駐屯し、穴が開いた大砲 2 基、グラース銃 20 丁と銃弾 600 発を装備していた。対する反徒の長は 4 人で、32 人の人員と銃 22 丁を装備していた。また、日常の言語はシャム語で、シャムの貨幣が流通し、シャム人とカンボジア人あるいは中国人との混血 type

croisé が多く見られるなど、シャムの影響が顕著であった。この地域にシャムの影響が強く及んでいることについては、1905 年のルロワの報告書でもまだ、スラエ・アムベルの産物の多くがシャム方面に輸出されており、シャム製のタバコが市場を独占していたことが記されている。

3. タイ湾岸地域における 1885 年反乱の経緯

本章では主にルクレールの反乱に関する報告書（Leclère, 1887a）によって、反乱の勃発から大規模な戦闘が終息するまでの経緯を整理しておく。

3.1. 反乱の勃発

1885 年 2 月末、デイ *Dey*・トレアン *Treang* のスダチ・トラン *Sdach Trañ*（4 章 1 節参照）、オクニャー・ピスヌローク・チューク *Okña Pisnolok Chhouk* が地方の官人たちを召集し、秘密集会を開いた。コムポートからは、バラット（4 章 2 節参照）・スオン *Soun*、ソピエ *Sophéa*・プロム *Prom*、メー・ポル *Mépol*・ウク *Ouk*、メー・カン *Mékang*・プリエプ *Préap* の 4 官人が参加した。彼らが帰還すると、コムポート知事チム *Chhim* の家で集会が開かれ、官人のバラット・クオン、バラット・メイ *Mey*、バラット・ウム *Um*、テープ *Tép*、クララーピエス *Kralapéas*・ミエス *Méas* らが出席した（Leclère, 1887a, p. 15）。

3 月 17 日朝、ハーティエンから派遣されたアンナム人の急使（用件は不明）がコムポート知事チムの家で捕えられ、斬首された。正午には、各 50 人の反徒団がコムポートのアヘン倉庫と電信局[6] を襲撃し、電信機を破壊し、電信線を切断した（Leclère, 1887a, p. 16）。

その後、反徒たちはプレーク・コムポート西河口に関所を設け、河路に木で堰を築き、石を詰めたジャンク船 1 隻を川底に沈めて防御にした。

フランス側は 4 月初旬に蒸気フリゲート船「射手座号 le Sagittaire」とジャンク船 2 隻を派遣し、関所とコムポート周辺で銃撃戦の末、500 人ほどの反徒たちを敗走させた。その後、トラウイ・コッに理事官府が開設され、初代理事官マルカン Marquant が着任した（Leclère, 1887a, pp. 17–20）。

3.2. バラット・クオン、クアン・キエムの主導権掌握とプノム・サー砦での戦闘

反徒たちはプノム・トゥック・クラホーム *Tuek Kraham*（不明）で集会を開き、バラット・クオンが主導権を握った（Leclère, 1887a, p. 20）。

7 月初旬に中国人海賊クアン・キエム *Quan Khiem* が反徒に合流し、バラット・クオンに代わって主導権を握ると、コムポートの町近郊の小山、プノム・サー *Sâ* に砦を築き、1,500 人以上の戦力を集結させた。7 月 12 日にクリップフェル Klippfel 隊が派遣され、銃撃戦の末、プノム・サー砦を陥落させた（Leclère, 1887a, pp. 22–26）。

3.3. 第 2 王の巡撫と反徒たちの投降

8 月 3 日に第 2 王が任命したコムポート知事、メイ *Mey* が着任した。第 2 王自身もプノム・スルオチ *Sruoch*、バンティエイ・ミエス、トレアン、コムポート地方を巡察し、多数の反徒の長が彼や理事官府に相次いで投降した（Leclère, 1887a, pp. 28–29; 1885 年 8 月報，9 月報）。

しかし 11 月末から 12 月初旬にかけて、複数の反徒団が再結成され、1886 年 1 月から 3 月にかけて、フランス人士官が指揮する鎮圧部隊が各方面に派遣された。3 月中旬には、コムポート周辺の村々が、反徒から焼き討ちや略奪をうけた（Leclère, 1887a, pp. 29, 31–32; 1886 年 2 月報，3 月報）。

3.4. ブン・ポー砦の戦闘から反乱の鎮静化まで

1886 年 3 月 30 日から 4 月 1 日にかけて、クアン・キエムがプノム・サー近くのブン（湖沼）・ポー *Bang-Po/Bo-Eng-Pô* に築いた砦に、600 人以上の反徒が集結した。5 月 8 日にヴォベール隊 100 人および理事官サントノワ Saintenoi 率

いる民兵 milicien 30 人が派遣され、銃撃戦の末にブン・ポー砦を陥落させた。

その後、1886 年末にクス *Kus*（現国道 4 号線上、コムポートとトレアンのあいだ）で王と反徒たちが会見し、和平が成立した。翌 1887 年 1 月に反徒側のブン・ポー砦とスナーム・アムピル *Snam-Ampil* 砦が撤去され、1888 年 5 月にフランス側のコムポート基地が撤去されることとなった（Leclère, 1887a, p. 33）。

4.　反徒の長たち

コムポート理事官府の定期報告書（Rapports）やルクレールの報告書（Leclère, 1887a）を見ると、メコン沿岸地域同様、タイ湾岸地域の反徒たちも、個別の長に率いられた集団が各地に割拠し、書簡を取り交わして互いに連絡し、離合集散を繰り返していたが、階層や序列を持った単一の組織を構成してはいなかった。長の大半は個人名の前に、オクニャー、バラット、メー・カン、メー・ポル、セーナー *Sena* などのタイトルが付されており、官人の地位にあったか、官人を自称していたことが分かる。

4.1.　知事

反徒の長たちのなかで最も官位が高かったのは、オクニャー・ピスヌローク・チュークで、トレアン地方の知事であると同時に、トレアン地方を筆頭とする複数の地方のまとまり、デイを統括するスダチ・トランという地位にあった。彼は 1885 年 2 月の秘密会議を主宰したが、それ以降は 1889 年半ばに罷免されるまで、少なくともタイ湾岸地域では動静が明らかではない（Leclère, 1887a, p. 15; 1889 年 7 月？（日付なし、内容から判断）報）。

コムポート知事オクニャー・チムは、コムポート在住のフランス人の殺害に反対するなど（Leclère, 1887a, p. 18）、反乱に積極的ではなく、主導的立場には立っていない。彼は 1885 年 9 月にクスで第 2 王に投降したとされているが（Leclère, 1887a, p. 29）、その後も、オクニャー・スナーン・チューク *Snang Chhuk* とオクニャー・ソピエ・プロムを補佐にして、プノム・スルオチ地方のカム・サット・チャーク・チュルム *Kam Sat Chak Chroum*（不明）に割拠している、プノム・スルオチ地方を奪還したなど（1885 年 10 月報, 1886 年 1 月報）、反徒の長としての活動が報告されている。

ピエム地方では 1885 年 8 月報から、プー・ニェート *Phu Nghet* という人物が、「重大な脅威」と名指しされるようになる。同年 10 月報によると、彼はピエム地方を統治し、トゥーク・ミエス *Tuk Meas* 村とコムポン・トラーチ村の住民に強い影響力を持っていた。翌 1886 年 1 月 15 日時点では、300 人を率いてクアン・キエムやバラット・クオンと合流していた　（Leclère, 1887a, p.　32）。同年 3 月報にも、主要な反徒の長として彼の名前が挙がっている。その後 1886 年後半から 1887 年前半にかけて、彼の反徒団 300 人がピエム地方を走り回っている、コムポン・トラーチを脅かしている、ピエム地方の複数の村で胡椒の税を徴収している、古い銃 50 丁で武装している、同地方を平穏とは言い難い状況に陥れているなどと、繰り返し報告されている（1886 年 8 月報, 9 月報, 10 月報, 1887 年 2 月報, 3 月報, 4 月報）。1887 年以降、彼はピエム知事と呼ばれるようになり（1887 年 4 月報）[7]、彼の名にオクニャー・リエチエ・セーテイ *Réachéa Sêthei* というピエム知事のタイトルを付した報告書もある[8]（1889 年 7 月？報）。

ルクレールによると、19 世紀中葉から後半にかけて、以下の 13 人が歴代コムポート知事を務めていた：①オクニャー・マウ *Mau*（1841 年頃）、②オクニャー・カン *Kan*（1845 年頃）、③オクニャー・トン *Tong*（～1859 年頃）、④オクニャー・スム *Sum*（1859 年頃）、⑤オクニャー・チェット *Chét*（～1864 年）、⑥オクニャー・トゥー *Thou*（～1868 年頃）、⑦オクニャー・ライ *Laye*（～1874 年）、⑧オクニャー・ニェート *Nghet*（～1878 年頃）、⑨オクニャー・ポック *Pok*、⑩オクニャー・チム、⑪バラット・

クオン、⑫オクニャー・メイ、⑬オクニャー・メン *Mén*（1887～1894 年）である。

このうち④スム、⑤チェット、⑦ライ、⑨ポック、⑩チム、⑫メイの 6 人は、王都から派遣されてきた。反乱の発生時点で知事であった⑩チムは、宮廷の大臣のいとこであり、若い頃にフランス軍に従って、ラオスに行った経験を持っていた。⑥トゥーと⑬メンの 2 人は、バンティエイ・ミエスの出身である。ルクレールが「反徒の知事」と呼ぶ⑪バラット・クオンは、コムポートの出身であった。彼については本章 3 節で詳しく取り上げる。③トンは中国系カンボジア人で、プノム・サーの麓に住居があり、約 550,600 ㎡のサトウキビ園と砂糖工場を持っていた[9)]。⑦ライはシャム人、⑧ニェートはコムポートのマレー人であった（Leclère, 1887a, pp. 7, 8, 10, 13–14）。すなわちコムポート知事の約半数が王都から派遣されており、その地位は明らかに世襲ではなく、非クメール人にも開かれていたことが分かる。

さらに⑩チム、⑪バラット・クオン、⑫メイの 3 人は、同時期に重複してコムポート知事を称している。⑪「反徒の知事」バラット・クオンを任命したのは、同じ反徒の長である、中国人海賊クアン・キエムであった。⑫メイは 3 章 3 節で触れた通り、第 2 王によって任命されている。⑩チムは反乱以前からの知事であり、自らの正統性の根拠として、ノロドム王によって任命され、誠忠飲水の儀式に参加した経験を主張している。彼はクアン・キエムとバラット・クオンに対抗するため、スダチ・トランであるオクニャー・ピスヌローク・チュークからクララーハオム *Kralahom*（水軍・水運を担当する大臣）に任命された上で、バラット・ウムを後任のコムポート知事に任命した（Leclère, 1887a, pp. 22–28）。クララーハオムはカンボジア王国の 5 大大臣の 1 人で、本来はプノム・ペンの宮廷にいてデイ・トレアンを管轄する役職である。メコン沿岸地域同様、タイ湾岸でも反徒の長たちが独自に知事の任命を行っていたことが確認される（北川, 2014, pp. 103–104）。

4.2. バラット

反徒の長のなかで最も人数が多いのは、知事を補佐する役職、バラットの地位にある者であった。少なくともタイ湾岸地域では、知事と同じく、バラットの地位が非クメール人にも開かれていた。例えばスオンというバラットは、コムポン・バーイ *Kampong Bay*（現在のコムポートの町の中心地）の中国系カンボジア人で、「最近髪（弁髪）を切った」と記されていることから（Leclère, 1887a, p. 15）、移民の初期世代であることが判明する。またネアク *Néak* というバラットは、コムポン・スヴァーイ *Kompong-Svay* 村（現在のコムポートの町の近郊）のマレー人有力者であった（Leclère, 1887a, p. 19）。

フランス植民地当局にとっても、バラットは現地を掌握するために有用な人材であったらしい。例えばルクレールの 1888 年の巡察報告書には、スナーン・イ *Y* と、元反徒の長であったバラット・ウム[10)]、バラット・ケス *Kés* が同行し、地名を始めとした現地情報を提供したと記されている。1887 年のコムポン・トラーチ巡察にも、コムポート知事とバラット・ウン *Un*、スナーン某、海南人幇長が同行している。同じくルクレールによる 1889 年 9 月 8 日付『オクニャー・モントレイ・サンクリエム・トゥット *Oknha Montrey Sangkream Tut* の行動に関する情報』（Leclère, 1889）には、プーム *Phum*（村）・タム・ター *Tham Ta*（不明）に住むバラット・エク *Ek* が現れる。彼はコムポート地方の北に接するタン・クサチ *Tang-Ksach* 地方ター・カエン *Takaen* のメー・スロック・メイ *Mey* から、タン・クサチ知事トゥットが反徒団を自宅に泊めたという報告を受け、これをプノム・スルオチ知事オクニャー・ヴォンサー・ウテイ *Vongsa Outey* に書簡で報告し、人員を率いてトゥットの逮捕に向かうよう、折り返し命令を受けている。

プノム・スルオチ知事は、バラット・エクの

他、プーム・トム・サンカエ *Thom Sang-Kaé*（不明）のスナーン・メン *Menh*、プーム・ター・カエンのモノー・ソック *Mono Sok* を部下に持ち、タン・クサチ知事は自らの部下として、バラット・スヴァーイ *Soay* とスナーン・エク *Ek* を任命している。現時点では可能性にとどまるが、バラットは現地で任用される在地性の高い役職であり、地方行政の実務担当者であったのではなかろうか。

4.3.　反徒の知事バラット・クオンの書簡

プノム・ペンの国立公文書館は、クオンがコムポート知事として発したクメール語書簡 2 通を保管している（Francon, 1887）。1 通はスナーム・アムピル村とマック・プラン *Meakprang* 村のメー・スロック宛、もう 1 通はオクニャー・マハー・サムバット・セーテイ *Moha Sambât Sêthei*（不明）宛である[11]。同送されたコムポート理事官府書記官の送り状には、クオンが多数のメー・スロック宛に、同様の書簡を送っていた旨が記されている。

2 通のうち、前者の内容は以下の 4 点である：①オクニャー（クオンの自称）はプレイ・トテン *Preiy Toteng* で王に拝謁し、バランセース *Barangsaes*（フランス人）がトゥック *Toek*・デイ（水と土の意味、領土を意味する）を王に返還し、我々はバランセースのリエチ・カー *Reac Kar*（行政府あるいは官吏）との戦闘をやめ、バラン *Barang*（フランス人）は戊年 3 月までに全てのカエト *Khaet*・スロック（地方）から兵を引くことになった旨を知らされた。②村内のオクニャー・ポニェ *Poñea*・プレア *Preah*（高官のタイトル、すなわち官人たち）、クマエ *Khmaer*（クメール）・チェン *Cen*（中国）・チャーム *Cam*・チヴィエ *Cvear*（マレー）の民全員に命ずる。竹を切って床材を作り、木でそれを受ける根太を作り、葉で壁を作り、スナーム・アムピル村のオクニャー（クオン）の家を修理し、正面のベランダも相応に美しくせよ。③カエト・コムポートのオクニャー・ポニェ・プレア、クマエ・チェン・チャーム・チヴィエの民で、ともにリエチ・カーをなそう（王に仕えよう）という心を持たず、バランセースのボン *Bon*（威徳）を頼ろうとする者は、「生きる者は生かせ、死ぬ者は死なせよ（殺してもかまわない？）」。④オクニャー（クオン）は皆の名簿を所持しており、オクニャー・ポニェ・プレアやニエイ・コン・トアプ *Neay Kong Toapv*（軍隊の長）の誰かがバランのボンを頼れと脅し命じてきた場合には、承服しないでオクニャー（クオン）のもとに逃げて来さえすれば、スナーム・アムピルとマック・プランのクマエ・チェンの兄弟たち、ネアク・モック・カー *Neak Mok Kar*（役人）たちの安全を保障する。

プレイ・トテンでの拝謁とは、1886 年末にクスで開かれた王と反徒たちの会見を指すのであろう。この書簡では、王に拝謁し、直接言葉を授けられたという文言に、クオンのコムポート知事としての正統性を裏づける意味を持たせている。その上で彼は、知事として住民の名簿を保持し、地方内の全住民から税や物資を徴収し、動員する権限を持つと同時に、外敵から保護する力を持つと主張している[12]。さらにフランス植民地権力に関しては、リエチ・カーやボンなど、カンボジア王権に対するのと同じ用語を使っており、両者が同等の立場で対峙する存在と見ていたことが分かる。彼が理解する和平とは、フランスの支配に降ることではなく、フランスが兵を引いて王に領土を返還し、自身が武器を置くことであった。彼は 1885 年 9 月 11 日に理事官府に投降した後も、50 人を率いてダムナック・トゥーク *Domnak-Touk* に砦を築いている（Leclère, 1887a, pp. 29, 31; 1885 年 9 月報）。3 章 3 節に記した通り、このときはクオン以外にも多数の長が投降後に反徒団を再結成しており、和平に関してフランス側と反徒側の認識に齟齬があったと考えられる。

4.4.　中国人海賊

反徒側にクアン・キエムという中国人海賊が

参加しているのは、まさしくタイ湾岸地域の特色であろう。フランス側は彼を「ラクザー *Rach Gia*（現ベトナム領内）の虐殺事件[13]の首謀者」と呼んでいる。彼は反乱に参加する前から、古い大砲で武装した2隻のジャンク船[14]を使って、コムポン・サオムからコッ・トーチにかけての地域を荒らしまわり、商船を襲い、反徒たちに火薬や鉛を供給していた（Leclère, 1887a, pp. 21–22; 1889年7月？報）。

1886年5月にブン・ポー砦が陥落した後は、コッ・コンの背後に位置するプレーク・ユオン *Yuon* を本拠地に、ノロドム王の権威が届かない自身の領土として、「コムポン・サオム川の向こう側」を支配した。この時期のクアン・キエムを指して、「スダチ・スレイモット *Sdach Sreimat*（海の王）」と呼んでいる報告書もある。彼は自身の領土で税を徴収し、アヘンを密売し、2隻の武装ジャンク船を使ってシャムの港と交易していた（1887年9月報, 10月報, 1888年3月報, 6月報, 1896年5月報）。1889年半ばにノロドム王からコムポン・サオム知事に任命されたコムポートのバラット・スオス *Sous* は、彼を恐れて現地入りを拒否した[15]（1889年6月報, 7月？報）。また1890年3～4月にプレーク・トナオトが海賊団[16]に襲撃された際には、彼は自分の家[17]があるリエムの住民たちに保護を約束している（1890年3月報, 4月報）。

反乱から10年後の1896年5月にようやく、クアン・キエムはコムポン・サオム知事によって逮捕された。コムポート理事官府月報ではこのときの状況を、「人々は元スダチ・スレイモットに無関心で、プレーク・ユオン村の彼の周囲には5～6人しかいなかった」、彼は「老い疲れ」、「抵抗することなく」捕えられたと報告している。

4.5. 偽王子

クアン・キエム自身がカンボジア王国の官人の地位やタイトルを称していた形跡はないが、少なくとも3人の偽王子を祭り上げている。第1の偽王子アン・ピム *Angk Phim*（王のおじ）は、王族を装うために、次のような演出をこらしていた。①「王の書簡のように赤い布で包まれた」書簡をプノム・サー砦に送り、身分に相応しい出迎えの派遣を要求した。クアン・キエムらはこれに応え、200人を派遣した。②砦に向かう行列では、4人の男性が担いだ輿に乗り、自身が任命した大臣たちに囲まれ、身近にノロドム王の姉妹ムチャス・サー・ウク *Machas Sâ-Ouk* 王女とその夫セーナー・カム *Kham* を伴っていた。行列は4隊に編成し、それぞれ軍旗を持った男性を先頭に、輿の前後に2隊ずつ並列させた。手元には浄めの水を入れた焼き物の壺を置き、人を不死身にする力を持つという水を見物の人々に降りかけた[18]。沿道の人々が加わったため、一行は1,000人以上に膨れ上がった。③当日は曇天で、彼が酷暑を避けるために曇らせたという噂が流れていた。しかし、砦に到着した後、プノム・ペンで彼と面識があり、真正のアン・ピム王子が「40年以上前に」死亡したことを知っていたバラット・ウムによって身分詐称が暴かれ、退去を余儀なくされた（Leclère, 1887a, pp. 22–25）[19]。

クアン・キエムはその後、ポル *Pol* という青年を、「ノロドム王が派遣してきた王子」に仕立てようとした。ポルは「知性と勇気がある」という理由で反徒たちに評判がよく、クアン・キエムは常に彼を連れ歩き、また村々に派遣して、村人を蜂起させる任務を与えた（Leclère, 1887a, p. 28）。さらに1886年9月報には、クアン・キエムがパントゥン *Phantoung* 王子と称する人物を身近に置いていたことが報告されている。

メコン沿岸地域では、ノロドム王の権威を否定する立場をとった長たちは、王弟シーヴァッターを正統王とし、彼から官印を授けられ、彼の宮廷の誠忠飲水の儀式に参集した。シーヴァッターは、ノロドム王の即位の当初から、自らの王位継承の正統性を主張し、シャム王国と接するトンレー・サープ *Tonle Sap* 湖北岸の

森林地帯に、ノロドム王の権威が及ばない、独自の領土を構築していた（北川,2014）。クアン・キエムもまた、シーヴァッター同様、シャム王国と接するコムポン・サオム地方の背後に、ノロドム王の権威が及ばない独自の領土を作り上げ、「海の王」と呼ばれていた。ただし王弟シーヴァッターと違い、王族でないクアン・キエムが住民を動員するためには、王に近い血筋を主張する偽王子を祭り上げる必要があったらしい。偽王子アン・ピムやポルの演出は、王族を直に目にする機会を持ちえない遠隔地の人々が、秀でた、煌びやかで超人的な威力を持つ存在として、王の血筋を認識していたことを示している。

さらにシーヴァッターや、クアン・キエムが祭り上げた偽王子たちの存在から、以下の可能性が導き出される。反乱が発生した地域の人々は、自身が居住する地域社会が、カンボジア王権を中心とする秩序のなかにあると認識しており、ノロドム王とその次弟シーソヴァット、末弟シーヴァッターらが属する特定の血筋にのみ、カンボジア王権の正統性が継承されることを認めていた。

前近代の東南アジアに広くみられるように、カンボジアにも王位継承順位を定めた法などはなく、複数の候補者が存在するのが常態であり、それぞれの時代の状況によって、そのなかから王が決定されていった。現在のカンボジア王国憲法でもなお、王位継承権者の規定は、アン・ドゥオン*Ang Duong*王（ノロドム、シーソヴァット、シーヴァッターの父）とノロドム王、シーソヴァット王のいずれかの子孫である男性となっている。

5.　結論

タイ湾岸の反徒団が階層構造を持った組織体ではなく、個々の長に率いられた集団のゆるやかな集合体であったこと、長の大半がカンボジア王国の官人を称していたことは、先論で扱ったメコン沿岸地域と共通している。彼らは官人の職権としてクメール語の文書を発し、住民を動員し、物資を徴収していた。官人の地位に正統性の裏づけを与えていたのは、カンボジアの王権であった。ただし、正統王の血筋に連なる王位継承権候補者が複数存在するため、反徒の長は自らの地位に裏づけを与える王族を選んだり、ときに創出したりすることが可能で、反乱は王位継承権争いという性格も帯びていた。遠隔地の住民には王族の真偽を判別することは不可能であったが、だからこそ反徒の長たちは、拝謁の経験を吹聴したり、「王の書簡」の存在や、自らが擁立する偽王子の威光を演出したりして、人々を納得させようとした。

一方フランス植民地権力は、1860年代中葉以降、ノロドム王と第2王シーヴァッターを擁するプノム・ペン宮廷にとって、最も有力な後援者であった。しかし、1880年代半ばから新たに理事官府が設置されていった地域の住民にとっては、フランスはあくまでも外来者であり、明らかに異質な文化伝統の担い手であるために、地域社会の秩序を保証し得る存在としては認識されず、むしろ秩序の破壊者として警戒されたのであろう。統一的な指導者や組織が存在しなかったにもかかわらず、反徒たちは反仏という1点で一致して行動し、広く現地社会の支持を得ていた。メコン沿岸地域では稲作農村地帯が反乱の拠点となっているし、タイ湾岸地域では反徒の勢力圏となったヴィエル・レーン湾周辺での村落人口の拡大が確認されている。

バラット・クオンの書簡に明らかなように、反徒にとっての和平とは、フランスの植民地支配を受け入れることではなく、フランスが王に領土を返還し、王権を中心とした秩序のなかに立ち還ることを意味していた。フランス側の軍事力では、地の利に優った反徒団を殲滅できなかった。メコン沿岸地域では、新任の知事たちが王の信任状をもって住民の支持を獲得し、反徒の長たちの勢力圏を縮小させていった。1892年にはシーヴァッターが森のなかで死亡した。タイ湾岸でも1889年にトレアン、ピエム、コ

ムポン・サオムに新知事が任命され、前2地方では反徒の長でもあった旧知事が罷免されて力を失った。コムポン・サオムでは、1896年に知事がクアン・キエムを逮捕して、ノロドム王の権威に服さない領域が消滅した。

以上のことから1885年反乱は、ノロドム王が王弟シーヴァッターらライバルに対して優位に立ち、それぞれの地域社会から正統王として承認され、第2王シーソヴァットがその後継者候補としての存在感を確立していく画期であり、カンボジア王権を存続させるべきことをフランス植民地権力に痛切に認識させることになった画期として位置づけられるべきではなかろうか。この反乱の30年後、1916年には4万人の農民がプノム・ペンに集結し、税などの負担軽減を直訴する事件が発生するが、彼らが自らの窮状を訴えるべき対象としたのは、実質的な権力者であるフランスの理事長官ではなく、シーソヴァット王であった（Chandler, 2008, pp. 187–191）。

註

1）東北隅にカンボジアの最高峰アウラル *Aoral* 山（標高1,771 m）がある。

2）トカウ *Thkov*（30～35軒の中国人の家）、コッ・プダウ *Kaoh Phdau*（15軒の中国人の家）。

3）クバル・プレーク・クレーン、ヴィエル・ター・ニェート、コムポン・スマチ、ヴィエル・レーン、プレイ・ノップ *Prei Nob*、リエム *Ream*、スラエ・ルー *Sré-Leo*。

4）プレーク・トム *Thom*・ヴィエル・レーンでは3か所、プレーク・バンティエイ・プレイ *Banteay Prei* では10か所の堰が航路を阻んでいた。これらの堰は、川岸で最も大きな木を切り倒し、枝つきのまま川に落とし込んだものであった。バンティエイ・プレイ村にはクアン・キエム配下のスナーン・テオ *Théo* が築いた砦、プレーク・バンティエイ・プレイ河口近くの左岸には反徒の関所跡が残っていた。

5）この後訪れたサー・ウク *Sa-Uc* も、戦闘の結果、30軒ほどの小屋の大半が破壊され、ジャンクを持たないためにシャムに逃れられなかった人々だけが残されていた。

6）1872年にプノム・ペンーコムポート間の電信線が敷設され、現在の国道3号線の原型となる陸路が開かれた（Pavie, 1884, pp. 4–5）。

7）1887年3月にルクレールがコムポン・トラーチを巡察した際には、ニェートは召喚に応えず、姿を現さなかった。7月になってから、80人以上の配下を引き連れてコムポートを訪問し、ルクレールと面会した。10月にも500人を率いてコムポートを訪れ、プレーク・コムポート左岸に住むバラット・ムー *Mu* の補佐を得て、6つの寺院の僧侶に衣服を寄進する儀式を行った（1887年7月報, 10月報）。

8）この報告書でニェートは、オクニャー・ピスヌローク・チュークとともに罷免され、後任には現バンティエイ・ミエス知事の元書記カエウ *Kéo* が任じられた。

9）彼は年に100ピクル以上の砂糖をアン・ドゥオン王に送っていた。砂糖工場は1889年時点でまだ稼働していた。

10）1885年9月13日にセーナー・イン *In* とともに理事官府に投降した（Leclère 1887a, p. 29）。

11）クオンとの合流地点と日時を指定する内容。

12）1886年10月報には、バラット・クオンがカムチャーイ *Kam Chay*（プレーク・コムポート右岸）で胡椒の税を徴収していると報告されている。

13）フランスは1867年にラクザーを占領した。同年6月16日朝4時、30人の反徒が駐屯地を急襲し、フランス人全員を虐殺した。反徒たちは2隻のジャンクで脱出し、ホン・チョン *Hon-chong* からハーティエン、フー・

コック *Phu Quoc* に向かった（Baurac, 1894, pp. 306–307）。

14）1886 年 3 月中半ばにも、中国人 30 人が乗り組んだクアン・キエムのジャンク船 2 隻がプレーク・トナオト河口に入港したという情報がある（Leclère, 1887a, pp. 32–33）。

15）理事官のルクレールはこの報告書で、知事に銃 20 丁と各 25 発の銃弾を与えるよう提言している。

16）海賊の指揮者はホン・ドゥック *Hong-Duc* というアンナム人で、元反徒の長ティエン *Thien* と同一人物と考えられていた。

17）クアン・キエムはヴィエル・レーンに 1 軒の家を建て、妻の 1 人を住まわせていた（1889 年 12 月報）。

18）その他で不死身を主張した反徒には、クオンに接近したセーナー・テープ *Tép* という人物がいた（Leclère, 1887a, pp. 20–21）。

19）『オクニャー・モントレイ・サンクリエム・トゥットの行動に関する情報』には、偽アン・ピム王子のその後の情報が含まれている。それによると、①彼を偽王子に仕立てたのはムチャス・サー・ウク王女とその夫セーナー・カムで、②彼の正体はチャウドック *Chaudoc* 地方（現ベトナム領内）出身のカンボジア人ムール *Moul* の子カエウ *Kéo* であり、③ 1889 年 9 月時点で彼自身は、ローク・セーナー・カス・スラー・カエト・チア・ネアク・プオク・サッチャン *Luc Séna Kas Sla Ket Chea Neac Puok Sachang* というタイトルを称し、プレーク・チア *Praek Yia* 地方に密使を送って、護符や印章を運ばせていた。④ヌット *Nut* という名のシャム人が彼の義父となっていたが、それは全くの親切心と偶然によるもので、ヌットは「2 年前」、「戦争の後」に、娘とともにカンボジアを去り、チャンタブリーに退いていた。

付表 1．反徒の長たち

	名前	
1	アン・ピム王子	4 章 5 節参照
2	オクニャー・スナーン・チューク	4 章 1 節参照
3	オクニャー・ソピエ・プロム	4 章 1 節参照
4	オクニャー・チム	
5	オクニャー・ピスヌローク・チューク	3 章 1 節、4 章 1 節参照
6	オクニャー・モントレイ・サンクリエム・トゥット	1885〜1886 年に反乱参加 1889 年 8 月、ソヴァン、リエイ、ラック、オムが率いる反徒団を、1 日 2 晩自宅に滞在させた。
7	オム *Om*	（Leclère, 1889）
8	オム *Om*	トモー・サー *Thma sa* サー・ウクでクアン・キエムに殺害される（Barbe, 1890）
9	オン・ドック・ドゥム *Ong doc Dum*	チャウドック出身、コムポン・サオムの 4 人の長の 1 人（Barbe, 1890）
10	ギン *Gîn* あるいはゲン *Gên*	トゥック・ロオク、プーム・チヴィエ *Phum Chvéa*、プーム・スオイ *Soye* のメー・スロック（Leclère, 1888a）
11	クアン・キエム	
12	クララーピエス・ミエス	3 章 1 節参照
13	サオ *Sao*	カンボジア人、ヴィエル・レーン、ヴィエル・ミエス、チューン・コー *Cheung Kou*、アヴァク *Avac* のメー・スロック（Leclère, 1888a）
14	サコー・チン *Sako Chin*	（1886 年 3 月報）
15	サヴァト・マー *Savat Mah* あるいはサヴァト・マート *Swat Mat*	プレイ・ノップ（Leclère, 1887a; 1885 年 8 月報）
16	セーナー・イン	註 11 参照
17	セーナー・カム	4 章 5 節参照
18	セーナー・テープ	註 18 参照
19	セーナー・トン *Tong* あるいはトゥオン *Tuon*	（Leclère, 1887a; 1886 年 3 月報）

20	ソヴァン *Sovan*	(Leclère, 1889)
21	チェン *Chén*	コムポン・トラーチ知事 (Leclère, 1887a)
22	テープ	3 章 1 節参照
23	ティエン、ホン・ドゥック	註 17 参照 アンナム人海賊
24	ティエン *Tieng*	トレアン出身、カンボジア人、コムポン・サオムの 4 人の長の 1 人 (Barbe, 1890)
25	ノップ・ロス *Nop-Ross*、ボレイ・ロス *Bourér Ros*	プレイ・ノップ (Leclère, 1887a; 1885 年 8 月報)
26	バラット・ウム	
27	バラット・クオン	
28	バラット・クム *Kum*	ピエム出身 コムポン・サオムの 4 人の長の 1 人 (Barbe, 1890)
29	バラット・ケス	4 章 2 節参照
30	バラット・スオン	4 章 2 節参照
31	バラット・チャン *Chan*	(Leclère, 1887a)
32	バラット・ネアク	4 章 2 節参照
33	バラット・ポック *Phok*	コムポン・トラーチ (Leclère, 1887a)
34	バラット・ムオン *Muong*	トゥーク・ミエス (1886 年 8 月報)
35	バラット・メイ	3 章 1 節参照
36	パントゥン王子	4 章 5 節参照
37	プー・チュオイ・ブオイ *Phu-Chuoy-Buoy*	(Leclère, 1887a)
38	プー・ニェート	4 章 1 節参照
39	ポル	4 章 5 節参照
40	マハー・サムボル・キン *Mâha-Sambol Kin*	(Leclère, 1887a)
41	ムチャス・サー・ウク王女	4 章 5 節参照
42	メー・カン・プリエプ	3 章 1 節参照
43	メー・ポル・ウク	3 章 1 節参照 カンボジア人
44	ラック *Lac*	(Leclère, 1889)
45	ラック *Lak*	コムポン・サオム、中国人、コムポン・サオムの 4 人の長の 1 人 (Barbe, 1890)
46	リエイ *Leai*	(Leclère, 1889)
47	ロン・チュー・イ *Long chu Y*	コムポート (Leclère, 1887a)

引用文献

Barbe. (1890). Rapport sur Kompong Som du 15 Décembre 1890. (プノム・ペン国立公文書館所蔵文書 No. 5958).

Baurac, J. C. (1894). La Cochinchine et ses habitants. Saigon: Imprimerie commerciale Rey, Curiol & Cie.

Chandler, David. (2008). A History of Cambodia. 4th ed. Boulder: Westview Press.

Delvert, Jean. (1983). Le Cambodge. Paris: Presses Universitaires de France.

Forest, Alain. (1980). Le Cambodge et la colonisation française. Histoire d'une colonisation sans heurts (1897–1920). Paris: L'Harmattan.

Francon. (1887). Envoi pour la traduction d'une letter du Balat Khuon. (プノム・ペン国立公文書館所蔵文書 No. 3743).

北川香子 (1992). 「アン・ドゥオン王の道－19 世紀中葉カンボジアの国内ルート再編について－」『南方文化』第 19 輯, 87–116 頁, 天理南方文化研究会.

Kitagawa Takako. (2005). "Kampot of the Belle Époque: From the Outlet of Cambodia to a Colonial Resort."『東南アジア研究』第 42 巻 4 号, 394–417 頁, 京都大学東南アジア研究所.

北川香子 (2014). 「スロック・スラエの反乱－コムポン・チャーム－クラチェの 1885 年反乱」『東南アジア－歴史と文化－』第 43 号, 87–116 頁, 東南アジア学会.

Laray. (1885). Lettre de recommandation du Capitaine Laray. (プノム・ペン国立公文書館所蔵文書 No. 11210).

Leclère, Adhemard. (1887a). Histoire de Kampot et de la rébellion de cette province. (プノム・ペン国立公文書館所蔵文書 No. 5181).

Leclère, Adhemard. (1887b). Rapport sur le voyage à Kompong Trach fait par le Résident de Kampot, M.A.Leclère. (プノム・ペン国立公文書館所蔵文書 No. 5956).

Leclère, Adhemard.（1887c）. Renseignement sur les agissements du Gouverneur de Peam.（プノム・ペン国立公文書館所蔵文書 No. 5948）.

Leclère, Adhemard.（1888a）. Rapport de M. A. Leclère, Résident à Kampot, sur sa tournée dans la province de Kampot du 8 au 16 Janvier 1888.（プノム・ペン国立公文書館所蔵文書 No. 5954）.

Leclère, Adhemard.（1888b）. Note sur la province de Kampot.（プノム・ペン国立公文書館所蔵文書 No. 1760）.

Leclère, Adhemard.（1889）. Renseignement sur la conduit l'Oknha Montrey Sangkream TUT.（プノム・ペン国立公文書館所蔵文書 No. 5949）.

Leroy,（1905）. Rapport d'une tournée effectuées par le Résident de Kampot dans Kompong Som et Véal Rienh.（プノム・ペン国立公文書館所蔵文書 No. 11504）.

Pavie,Auguste.（1884）. Excursion dans le Cambodge et le royaume de Siam. Saigon: Imprimerie du Gouvernement.

Rapports périodiques, économiques et politiques de la résidence de Kampot.（1885–1905）.（フランス国立海外公文書センター所蔵文書 INDO-RSC-00356）.

Rousseau, A.（1918）. Monographie de la résidence de Kampot et de la côte cambodgienne du golfe de Siam. Saigon: Imprimerie-Librairie de l'Union.

Tully, John.（1996）. Cambodia under the Tricolour: King Sisowath and the 'Mission Civilisatrice' 1904–1927. Clayton: Monash Asia Institute.